

## 2005年度日本建築学会大会（近畿）

### 建築計画部門研究懇談会

#### 「21世紀COEプログラムにみる建築計画研究の将来」

記録：森 傑（北海道大学）

本研究懇談会は、9月1日（木）13:00～17:00に開催された。司会は岸本達也（慶應義塾大学）、副司会は鈴木雅之（千葉大学）。西村伸也（新潟大学）から主旨説明が行われた後、4大学における取り組みの解説があり、それを受けての討論が行われた。

主旨説明：西村伸也（前掲）

21世紀COEプログラムは、平成13年6月の「大学の構造改革の方針」に基づいて平成14年度から文部科学省の「研究拠点形成費補助金」事業としてスタートした。平成14年度の「学際、複合、新領域」、平成15年度の「機械、土木、建築、その他の工学」、平成16年度の「革新的な学術分野」において建築に関わるCOEが8件採択された。本研究懇談会では、世界最先端と言われている実際の研究プログラムを素材に、21世紀における建築計画研究のニーズや方向性について検討したい。また、次世代の若手研究者へのメッセージとなるような討論としたい。

主題解説

都市空間の持続再生学の創出：松村秀一（東京大学）

これまで全く別々に学問体系を構築し人材育成を行ってきた異なる専攻が融合的にアプローチしていこうという点に特徴を持つ。現在社会における諸問題は複雑化・多様化しており、これら全てを旧来の建築学で解決することは難しい。土木・建築・都市を基礎に新しい土台をつくり、一緒に解決していくべきだという認識である。拠点形成の目標は、(1)都市持続再生学の創出、(2)若手研究者の育成、(3)国際レベルにおける知と人材の交流であり、「A.環境マネジメント」「B.ストックマネジメント」

「C. 社会情報マネジメント」の研究成果を「D. 都市空間の計画設計技術の統合」において具体的な提案として発信するという体制で取り組んでいる。分野融合的研究(A~C) + アクションスタディ(D)という戦略的共同研究の展開の中で、どのような問いを立て得るのかを検討すること自体が、若手研究者の育成に繋がると考えている。

安全と共生のための都市空間デザイン戦略：重村力(神戸大学)

神戸大学では、従来からの環境・コミュニティ・防災への強みに加え、阪神・淡路大震災復興への関わりの中で防災を越えたまちづくりの問題についての実践的・学術的蓄積があった。これまでの研究成果を改めて問い直すことも含めて、(1)国際的研究者の育成、(2)実践的な研究者の育成、(3)災害復興直接支援をテーマにプログラムを推進している。具体的には、若手研究者を主体とした国際相互交流を狙いとした「都市空間デザインセンター(UDC)」や市民・NPO・コンサル等のローカルな実践者との交流を通じて若手育成を目指す「神戸フィールドスタジオ(KFS)」を設立し、他領域との有機的連携でもって、安全と共生を両立した減災・復興への直接的貢献に取り組んでいる。

循環型住空間システムの構築：竹下輝和(九州大学)

本大学のCOEプログラムの基礎となっているのが「スループット(T=W-D)最大化」の論理であり、D(Environmental Damage)の低減とW(Welfare)の増加を目標とし、研究推進・若手育成・国際交流・広報・広報事業・将来構想を軸に取り組んでいる。体制としてはDグループとWグループに分かれてそれぞれが研究を実施し、スループットで総合評価していく考え方である。このような研究活動と相互反映するかたちで、ダブルメジャーを基本とする専門家育成とその教育サービスに徹する「循環型住空間システム専攻」を立ち上げる計画としている。

巨大都市建築ストックの賦活・更新技術育成：深尾精一(首都大学東京)

プログラムの検討過程では特に首都の大学であることの意義が問い直された。急速に質を変化させながら蓄積されている巨大な建築ストックの問題は、専門分野に特化した従来の建築工学の体系では捉えにくいという認識のもと、それらを賦活し更新し得るメタ技術を開拓し人材を育成することを目標としている。特に建築計画の観点で言えば、従来の明快だが単純な標準解ではなく、個別解であるが汎用性を備えたもの

が求められる中、プロジェクト実施連携研究とT型人材育成が重要である。具体的な建築プロジェクトから得られる知見に基づき賦活・更新のための新たな枠組みを探求すると同時に、学生がプロジェクトチーフの役割を担うことで総合的リサーチマネジメント能力を向上させる教育に取り組んでいる。

討論：

各COEプログラムの特徴を本研究協議会のテーマと照らし合わせるというかたちで、服部岑生(千葉大学)の進行により討論が始まった。松村はまず、結局はどこで考えても同じようなプログラム内容になるのではないかという印象に触れたあと、建築計画が中心になる必要もどこかが中心になる必要もないという見解を示しつつも、東京大学では計画という領域が主導的にリードして取りまとめている現状を強調した。重村は、土木分野も含めた計画系がCOEのグランドデザインにおいて中心的役割を担っている状況を見て、研究が設計教育に生かされているという点をアピールすることの重要性を指摘した。竹下はさらに教育面に注目し、プロジェクトを組織として実施する取り組みと個人の研究を追求する取り組みとでは、そのプログラムの中で育つ若い研究者の性質が大きく違ってくるとの見解を示した。深尾は、建築計画という視点でCOEを捉えることは困難であり、今後の変動する学問体系の中でむしろ建築学自体が生きていけるのかという問題が大きいとした。それを受け服部は、計画系の位置づけはやはり“複合”の中に見出せるはずと述べ、西村は、建築計画をどうつくり変えていくのかを考える先には他の分野との関係という課題があり、本研究懇談会を通して、巧みな関係を広げていくことの必要性が明らかとなったと付け加えた。

まとめ：服部岑生(前掲)

各COEプログラムは共生・再生・循環等といった社会課題にいかに向き合うのかという問題提起を中心に取り組んでいる点で共通しており、建築学が中心となって総合的に考えていくことの必要性が分かった。ダブルメジャー等の“学際”“複合”という流れの中での教育では、育成した人材をどこへ輩出するのかという現実的な課題は残されている。また、UIA対応など教育の国際的互換性から見ると、学部教育は古い

グループに戻らざるを得ないという指摘も重要である。将来の建築教育は学部・大学院の中でどのように構成すべきなのか、JABEEとの関係も含めて今後も検討が必要である。